

# 英語の音と発音に関する音韻論的考察

## 一音節数の減少を中心に一

今 関 雅 夫

### 1. はじめに

あらゆる言語において、その言語内の音や発音は時とともに変化を辿ってきている。印欧語族（インド・ヨーロッパ語族）に属す多くの言語も、元はひとつの「ことば」と考えられる祖語がおよそ7,000年から9,000年の歴史の中で、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、サンスクリット語などの言語に枝分かれして変わっていったわけであるが、そこで生まれていった言語と他の言語の主なる違いは、ことばは音声言語である以上、音や発音の違いであると言ってよいであろう。さらに、個々の言語に分かれた後も、そこで生まれ育った単語や表現の他に、他の民族との接触によって入ってきた借用語、グローバル化に伴って入ってきたことば等、現在使われている各言語は実はその中味が複雑になってきているのであるが、音や発音が変化するということは昔と変わらず、今も続いているのである。

印欧語の故郷が具体的にどこであるかという説は、リトアニア説、トルコ説等いくつかあるが、音韻変遷を考慮した上で得られる理論上の印欧祖語の故郷は、単語の観点から特定する場合、共通語として \*bhāgo-s（ぶなの木、英語では beech）、\*medhu（蜜蜂、英語では mead）、その他「冬」、「雪」、「鮭」等が挙げられることから、一般的に「冬」が厳しく、「雪」が降り、しかも「海」に面していなかった地域」と考えられている。そして、そのとき使われる、例えば、「蜂蜜」を意味した祖語 \*medhu は、ギリシャ語 methy、初期スラブ語 medu、リトアニア語 medus、古アイルランド語 mid、ウェールズ語 medd、ブルトン語 mead、ゲルマン語祖語 \*meduz から古ノース語 mjöðr、古フリースラン語、中期オランダ語

mede、ドイツ語 mead、古英語 medu 等に見られ、様々な言語でその音を変えていったことが分かる。古英語 medu はその後現代英語 mead に変わっていく。

また、例えば「わたし」を意味する英語の " I " は、祖語では \*ego(m) が考えられ、その音からサンスクリット語 aham、ヒッタイト語 ek、ラテン語 ego、ギリシャ語 ego、ロシア語 ja となり、ゲルマン語祖語 \*ekan から古フリースラン語 ik、古ノース語 ek、ノルウェー語 eg、デンマーク語 jeg、古高地ドイツ語 ih、ドイツ語 ich、ゴート語 ik、古英語 ic とそれぞれの言語で音を変えていった。

同一言語内でもその歴史の中で音や発音が変わっていったのであり、英語においても前述の「わたし」を意味する古英語 ic /itf/ は、その後、14 世紀頃に i /i:/、15 世紀頃に I /i:/、 /ai/ へと変化していくのである。

このように、印欧語族内の各言語においても、また、各言語内の単語や表現においても、悠久の歴史の中でその音を変えていったのであり、今後も変化の速度に違いはあるものの、続くと思われる。

この小論では、英語における音の変化を概観し、そこから考えうる英語を母語とする人たちの音に対する感性と、その結果として生まれる音の変化の原因を考察してみようと思う。以下、現代口語英語の縮約、古英語から現代英語までの単語の中の音の消失、それらの流れから考えられる「音や発音の今後」を見ていく。

## 2. 現代口語英語の contraction (縮約) について

学校で習う縮約としては、/it iz/ (It is) を /its/ (It's)、/iz nɒt/ (is not) を /iznt/ (isn't)、/ai wil/ (I will) を /aɪl/ (I'll) 等の音と綴りであり、場合によって、/gənə/ (gonna = (be) going to) や /wɒnə/ (wanna = want to; want a) があるが、実際の場面では、日常的に様々な縮約が現れ (そのいくつかは以下に掲げるような音であるが)、その音連結 (liaison) には有声音と有声音にはさまれた無声音は有声音化することがある等、ある程度の規則性はあるにせよ、英語を外国語とする者には非常に複雑で分かりにくいところである。

later → /leɪdə/

butter → /bʌdə/

at a time → /adə/ time

the way to go → the way /də gou/

recited → /rəsaidəd/

a bunch of stuff → /ə/ bunch /ə(v)/ stuff

I got you a book. → I /gɒtʃu/ a book.

また、ネット上でもカリフォルニア在住の元英語教師であるブラジル人が、アメリカ人の友人たちとの会話で気付いた英語の音をメモしたものを公開している。その音は非常になめらかに流れ弛緩しているような音なので著者自ら relaxed pronunciation と呼んでいる。(reduced form と呼んでいる人もいる。)文字のイメージする音を実際に発音してみると、少し速めの自然なカジュアルな会話なら多分そうなると思われる音が生み出されるのに納得する。もちろん、このような音を正確に記述するのは難しく、確定した音にはなっていないので辞書にも記述されていない。次にそこで示されているいくつかを列挙する。

BIN=BEEN: How have you "bin"?

Y=YOU: Y'know what I mean?

WHADDJA= WHAT DID YOU: Whaddja do over the weekend?

WHADDYA= WHAT DO YOU: Whaddya say?

WUTCHER= WHAT IS YOUR: Wutcher name?

TSKO= LET'S GO: Tsko to the movies!

TSUP= WHAT'S UP?

NKU= THANK YOU: Nky. It's very kindavyou!

KINDA= KIND OF : It's very kindavyou.

DJA= DID YOU: Dja ever notice she is quite beautiful?

PROLLY= PROBABLY: He is proolly working now.

KIN= CAN: I kin stay here with you.

WATCHA= WHAT DO YOU: Watcha mean?

WHADJUH= WHAT DID YOU: Whadjuh say, Sir?

BETTA= HAD BETTER: I betta go now.

DJUHVA= DO YOU HAVE A: Djuhva wife?

LEMME= LET ME: Lemme show you something!

LOTTA= LOT OF: I have a lotta friends.

IZZY= IS HE?: Izzy your brother?

DOEZZY= DOES HE: Doezy like you?

CUZ= BECAUSE : Cuz I don't like you.

(<http://www.geocities.com/Athens/Acropolis/8995/relaxed.html>)

他にもネット上にはたくさんの発音関連のページがあり、多くの場合、縮約形にも言及がある。

betcha = bet you: I betcha can't eat ten hot dogs.

mighta = might have + consonant: I mighta gone with him if he'd invited me.

mightav = might have + vowel: She mightav agreed to come if you'd been nicer to her.

(<http://www3.telus.net/linguisticsissues/ReducedForms.html>)

このように見えてくると、可能な縮約形は数限りなくありそうなので学習者は一体どのように対処すべきか、という問題があるが、上記のようなページである程度学んだ後、実際の会話の中で聞き取る訓練と、さらに言葉の前後から何を言っているかを正しく推測する力を付けることが重要と思われる。

この節の音に関するまとめ：上記話し言葉の縮約形を見ると、2語あるいは3語が最終的に1語のように発音されていることが分かる。また、2音節語が1音節語になっているものもある。(例：because)

### 3. 古英語から近代英語に見られる音変化

現代英語の会話に見られる単語や表現のさまざまなりエゾンや縮約はもちろん今に始まったわけではなく、語のレベルでは古英語から中英語の "e" の消失にも

見られる。また、語尾音消失、語頭音消失などもあり、これらも概して母音等を1つ減らして音節が減るという特徴がある。

### 3. 1. "e" などの消失

例えば、古英語強変化男性名詞の1音節語 *stān* (= stone) は、主格を除いて全ての格で語尾変化があり2音節語になるが、一方現代英語では全て1音節語になる。

Singular (Sg.)	Nominative (Nom.)	<i>stān</i>
	Dative (Dat.)	<i>stāne</i>
	Genitive (Gen.)	<i>stānes</i>
Plural (Pl.)	Nom.	<i>stānas</i>
	Dat.	<i>stānum</i>
	Gen.	<i>stāna</i>

現代英語では上記の順番に、stone -stone - stone's - stones - stones - stones' となり、全て1音節語である。

他にも、2音節語である弱変化男性名詞 *nama* (= name) の場合も現代英語では全ての格で1音節である。

Sg.	Nom.	<i>nama</i>
	Accusative (Acc.)	<i>naman</i>
	Dat.	<i>naman</i>
	Gen.	<i>naman</i>
Pl.	Nom.	<i>naman</i>
	Dat.	<i>namum</i>
	Gen.	<i>namena</i> (3音節語)

現代英語では、順に、name - name - name - name's - names - names - names' となり、全て1音節語である。

また、古英語で「そのよい人の」を表現すると "*Þās gōdan mannes*" となり、それぞれ1音節語、2音節語、2音節語であるが、現代英語では、"the good man's" となり、それぞれが1音節語である。

### 3. 2. 語頭音消失

古英語の過去分詞ではよく "ge-" がつくものがあるが、この語頭音も中英語、現代英語ではなくなっている。例えば、bindan (= bind) の過去分詞は ge-bunden であるが、現代英語では bound と 1 音節語になっている。

語頭音消失の中でも主に母音の消失を aphesis といい、語頭の強勢のない母音の消失をいう。いくつかの例を見てみよう。

bet < abet (= 犯罪などをけしかける)

bishop < episcopus < L. from epi- "over" + skopos "watcher"

Cajun < Acadian from Micmac Indian word akadie "fertile land" (= カナダのアカディア出身のフランス人移民の子孫で現在ルイジアナ州に住む人々)

cute < acute (先のとがった → 鋭い、明敏な → 魅力のある、かわいい)

dropsy < M.E. ydropsy, from O.Fr. idropsie, from L. hydropsis, from Gk. hydrops (gen. hydropos) "dropsy," from hydor "water" (= 水腫)

gypsy < egypcien (= Egyptian)

lone < alone < al(l) one

peal < appeal, with the notion of a bell that "summons" people to church (= 鐘の響き)

possum < opossum (= オポッサム、フクロネズミ)

round < around

spy < O. Fr. espier "to spy"

squire < esquire from M.Fr. esquier "squire," lit. "shield-bearer" (for a knight), from O.Fr., from L. scutarius "shield-bearer, guardsman," from scutum "shield" (= 騎士の従者、郷士)

tempt < attempt from O.Fr. attempter (14c.), earlier attenter, from L. attemptare "to try," from ad- "to, upon" + temptare "to try"

wayward < aweiward "turned away" (= 勝手気ままな、気まぐれな)

他の語頭音消失 (apheresis, aphaeresis) の例としては、cause (< because)、coon (< raccoon)、specially (< especially)、till (< until) などが挙げられる。また、cept

(< except) はまだ主な辞書には取り上げられていないようだが、語として確立する可能性がある。

語頭の子音消失もあり、代表的なものは kn- や gn- で始まる語である。kn- で始まるものとしては、knack (= 要領)、knead (= こねる)、knee (= 膝)、kneel (= ひざまずく)、knife (= ナイフ)、knight (= 騎士)、knit (= 編む)、knob (= ドアノブ)、knock (= ノックする)、knot (= 結び目)、know (= 知る)、knuckle (= げんこつ)、knurl (= 小突起、こぶ) などが挙げられ、また、gn- で始まるものとしては、gnarl /na:l/ (= 木の節、こぶ)、gnash /næʃ/ (= 歯をくいしばる)、gnat /næt/ (= ブヨ)、gnaw /nɔ:/ (= かじる)、gnome /noum/ (= 地の精、金言)、gnu /nj:/ (= ヌー) などがある。元来は音として /k/ や /g/ の音が入っていたのであるが、これらは 17 世紀に消失した。kn- や gn- の発音のつながりは、呼気が軟口蓋で破裂したあと (/k/ または /g/)、そのまま口から外に出ようとするとき、次の音 /n/ が歯茎鼻音のため呼気は口から出られず、鼻へと送られるのに時間がかかり、音として出るのに不自然であることが /k/ や /g/ が発音されなくなった理由と思われる。特に語頭の破裂音は強く、これが語中ならば破裂が弱くてすみ、例えば acknowledge /əknɒlɪdʒ/ のように /k/ が発音されるのである。

Connecticut, corpuscle, indict, muscle などの語中の /k/ は発音されないが、それは、/k/ を入れないほうがその前後の音との関係で、語全体として発音がしやすくなるからである。つまり、舌の後ろをせり上げて破裂音を作る無声軟口蓋破裂音 /k/ を入れると、その前後の音が主に舌先で調音される音なので、呼気の流れが不自然になり発音しにくくなるのである。

kn- と同様に pn- や ps- も自然な発声になりにくく、pneumonia や psychology では /p/ 音が消失した。語頭の /p/ 音は母音とは問題なくつながるが、子音とは play 等の /l/ や price 等の /r/ を除いてつながりにくいようである。

舌の動きが /kn-/ とよく似た /kl/ は、例えば、clock があるが、この /klɒk/ を /lɒk/ とは発音しない。これは、/n/ の場合、呼気が口から出ずに鼻から出る歯茎鼻音であるのに対して、/l/ の場合、舌先は上歯茎に接触はするが舌の両側から呼気が外に出る歯茎側音なので、破裂音の後、呼気はそのまま口から外へ出ていけるので、その流れは自然であり、/kl/ は問題なく発音できるので、/kl/ の /k/ の消

失は起こらない。

### 3. 3. 語中音消失

元来は発音されていた語中の音が消失してしまったものをいい、syncope という。そのいくつかを以下に掲げる。

語中の音が消失したが、文字は残っている語の例：

castle: /t/ の音が消失

daughter: /x/ の音が消失

glisten: /t/ の音が消失

Greenwich: /i:/ が /i/ に、また、/w/ が消失して /grinitʃ/ または /grinidʒ/ となった。

night: /x/ の音が消失

often: /t/ の音が消失。OE で oft, ME で oftin。発音の流れとしては、/ɔ:ft/, /ɔ:ftn/, /ɔ:fn/ で、最近では /ɔ:ftn/ も復活してきている。/t/ の音が入っても入らなくても 1 音節である。

talk: /l/ の音が消失

taught: /x/ の音が消失

Worcester /wustə/: /s/ の音の消失

wright: /x/ の音が消失

ただし、語尾ではあるが、laugh、enough などでは gh の音は /f/ になって残っている。また、through のように語尾でも gh の発音されないものもある。

語中の音が消失したが文字も残っていない語の例：

anthem < OE antefn antiphon (= 交唱聖歌) from L.L. antefana, from Gk. antiphona  
"verse response"

business < O.E. bisignisse (Northumbrian) "care, anxiety," from bisig "careful, anxious,  
busy, occupied" + ness

dean < deacon from O.Fr. deien, from L.L. decanus "head of a group of 10 monks in a



monastery" 元来は /k/ の音が入っていた。

fancy < fantasy /tə/ の音が消失。

head < heafod (= top of the body) /f/ や /v/ 音のない発音は 13 世紀頃から現れる。

lady < hlǣf-dige from hlaf "bread" + -dige "maid," related to dæge "maker of dough"

lord < half-weard (=one who guards the loaves) from hlaf "bread, loaf" + weard  
"keeper, guardian, ward"

ma'am < madam

palsy (= 麻痺) < paralysis from Anglo-Fr. parlesie, O.Fr. paralisie, from L. paralysis

priest < Gk. presbyteros

proctor (= 学生監、試験監督官) < procurator

### 3. 4. 語尾音消失

*Hamlet* (W. Shakespeare 作) の第 1 幕第 2 場で Horatio が Hamlet に、

Season your admiration for awhile	しばらくの間驚きを抑えて私が申し上げるまで
With an attent ear, till I may deliver,	注意してお聞きいただきたい
Upon the witness of these gentlemen,	ここにいる男たちの目撃もありこれからお話し
This marvel to you.	することはあなたをびっくりさせるでしょう

と語る場面で使われている "attent" は元来は発音されていた語尾の音が消失してしまった "attentive" の語尾音消失である。以下に、語尾音消失 (apocope) の例をいくつか掲げる。

ad < advertisement

as < O.E. alswa "quite so"

cinema < Fr. cinéma, shortened from cinématographe

chem < chemistry

cred < credibility

fab < fabulous

fan < fanatic

info < information

mag < magazine

math < mathematics

prom < promenade (= 遊歩道)

psych < psychology

pud < pudding

sing < singen

### 3. 5. 語の両側が消失

語頭音、語尾音が消失する例も散見される。

flu < influenza (flu の OED 初出例は 1839 年)

fridge, frig < refrigerator (frig の OED 初出例は 1928 年)

### 3. 6. その他 (語尾音添加など)

上記 3. 5. まですで主に音が消失する例を取り上げ、概観してきたが、逆に音が増えた単語も以下の通り数はそれほど多くはないが存在する。語尾音添加は paragoge という。

earnest < ME ernes

sound < ME soun

often < OE oft

often がそうであるように、単語をそのスペリングに忠実に発音しようとする人たちもいる。「亀」tortoise /tɔ:təs/ を /tɔ:tois/ と発音する人もいるようだ。

([http://www.askoxford.com/concise\\_oed/tortoise?view=uk](http://www.askoxford.com/concise_oed/tortoise?view=uk))

この節の音に関するまとめ：歴史的な観点からは、主に格変化を表す部分が消

失し、その結果音節数が減った。格変化が無くなっていった理由は、それぞれゲルマン系の民族ではあるが、8世紀から9世紀にブリテン島に侵入してきたヴァイキングや11世紀に侵略してきたノルマン人との接触による言語の単純化が考えられる。特に、ノーマン・フレンチというフランス語を使用していたノルマン人に支配されていた影響は大きく、格変化が大幅に減っていき、結果として英語は語順が重要な言語になっていくのである。

また、格変化が無くなった単語の中には、語頭、語中、語尾等の音の消失が起こったものもあり、こちらも結果として音節数減少につながった。これらの音の消失の理由や起源は音の簡略化、誤った発音の定着等いくつか考えられるが、特に発音のしやすさ故の音節数減少が考えられる。

#### 4. まとめ：音の変化の特徴と今後

音や発音の変化を、第2節では現代口語英語における音連結（リエゾン）、第3節では主に音消失という観点から見てきたが、音が変化して最終的には音節数が少なくなり、主に1音節語（単音節語）になっていったと考えられる。1音節というのは、母音1個でことばの意味を表せる最小単位であり、発音しやすいことも特長である。

第2節で取り上げたのは主に文のレベルであったが、文も単語が増えていったものと考えれば、2つの単語を個々に発音していたものを音連結して1語のように発音されることになったのも、音節数が少なくなっていった理由と同じではないかと考えることができる。その理由とは上記で述べたように、音の簡略化、誤った発音の定着、発音のしやすさ等であろうが、このようなことが起こったその元となる原因は、おそらく、発音の速度が今よりも少し遅かったことにあるのではないと思われる。/kn/の発音をしていたという事実は、その発音をしても呼気の流れが不自然にならなかったということであろうから、発声の速度に余裕があったはずと考えられる。詩の朗読では韻の響きを楽しむということがあるが、こういったことが出来るのも発音の速度がある程度今より遅かったからできたに違いない。

さて、英語の発音はこれからどうなっていくのであろうか。非常に推測するの

は難しいのであるが、ただ、音や発音の変化は話す速度と関係があるというならば、今の英語の発音は十分に速いのでこれ以上速くなることは適切な意味情報の伝達から考えて無理だと思われる。第2節で見たような音連結は意味伝達の上でくずしようがないところまで来ているので、この辺りで止まるのではないかと思われる。第3節で見たような1音節化や音節数減少はこれからも続くと考えられる。

## 参考文献

### 辞書

安井稔『新言語学辞典』（研究社、1982）

Joseph T. Shipley, *The Origins of English Words* (Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1984)

J.R. Clark Hall, *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (London, Cambridge University Press, 1970)

*Oxford English Dictionary on CD-ROM*

<http://www.etymonline.com/> (オンライン辞書)

### 発音、音韻関係

David Reid, *Sound Symbolism* (T. & A. Constable Ltd., 1967) [邦訳：『英語：音の意味』、デヴィッド・リード著、田中稔訳、山口書店、1995]

Henry Cecil Wyld, *Studies in English Rhymes from Surrey to Pope* (John Murray Ltd., 1923) [邦訳：『英語脚韻の研究 — サリーからポーブまで —』、H.C. ワイルド著、安井稔他共訳、研究社出版、1992]

御園和夫『英語音声学研究 理論と応用』（和広出版、1995）

南比佐夫『音声英語読本』（近代文藝社、1995）